

書 評

加藤政洋 著

『花 街 — 異空間の都市史 —』

竹 中 聖 人

本書にないもの

2005年に日本で公開された映画『SAYURI』は、第二次世界大戦期に京都の祇園を生きた“ゲイシャ”の物語である。ハリウッドの手による“日本美”や、日本人俳優が複数出演していたこともあってか話題となり、公開当時にはこの映画の感想をさまざまところで目にした。そのときよく見かけた感想として「あれがどこまで正しいのか分からない」というものがある。外国映画で日本が舞台になったり日本人が登場人物にいたりすると、よく日本や日本人に対する勘違いの有無が問題になる。しかし、この『SAYURI』では多くの人にとって芸者の世界は自分とは縁のない遠い世界であり、はたして映画内で描かれている芸者の世界がどこまでありえて、どこがありえないことなのか判断しかねたようである。(さらにやっかいなことに原作はまるでノンフィクションであるかのような体裁をとった小説だった。)

この映画の舞台となった空間を「花街 (かがい・はなまち)」と呼ぶ。多くの人にとってはあまり縁のない世界かもしれない。たとえば京都の花街ならば「一見さんお断り」というハードルが存在していて、たとえ大金を積んでも紹介にあずかれなかった人は敷居をまたぐこともできない世界などと語られる。そうした縁遠さがかえって関心をひくのか、花街に足を踏み入れるのをちょっ

とした夢やロマンとしている男性も（なかには女性も）いるようである。

本書は、そうした遠い世界とされている「花街」をそのままタイトルにかかげた研究書である。しかし、本書は『花街』というタイトルながら、これまでに出版されてきた花街に関するものと少し視点が異なっている。著者は人文地理学を専門とし、花街の研究書に多い文化史や女性史の要素はかぎりなく薄く、花街が都市においてどのような文法を果たしてきたのかが政治過程を中心にして語られている。また、本書で扱われる「政治」も政治家や議会といった意味の政治であって、花街におけるミクロな権力関係（男一女、おかあさんー舞妓など）は扱われていない。その結果、著者本人も弁解しているように、《本書では遊興ないし娯楽、あるいは芸能に関する側面を考慮の外におかざるを得なかった。経営者はともかく、芸能の師匠、学び働く芸妓、あるいは遊興する者たちの声をまったく拾うことができず、人物のいない風景となって》(p. 309) いる。したがって、花街における女性の地位や役割、花街にみられる性意識といったものを知りたいなら、本書は役に立たないであろう。

花街を生きる人物の描写が欠けている以外に、もうひとつ『花街』というタイトルからすると驚くものが抜けている。それは京都である。映画『SAYURI』の舞台の祇園はもちろん、それ以外の京都の花街についても言及がない。私自身が京都の大学院に籍を置いていることもあり、「花街」といえば京都の花街をすぐに思い浮かべてしまうので、はじめて本書を手を取ったときはかなりとまどった。しかし一読してわかることは、京都の花街に言及していないことは意図的であり、むしろ花街といったときに京都をすぐに連想してしまうことが誤解に基づいていることである。

花街という空間に対するイメージは（１）一般人からは縁の薄い遠くにある特殊な世界であり（２）近代以前からの日本の伝統が残り伝えられている世界というもの、ではないか。こうしたイメージを私自身も持っていたため、古都にあり格式の高さを誇る京都の花街が取り扱われていないことに驚いてしまった。本書ではこうした２つのイメージが誤解に過ぎず、そうした前提から離れ

たならば、まったく異なる空間として花街を考えていく余地があるのを教えてくれる。以下では、本書によって明らかにされる新たな花街像をあげていってみよう。

1 花街は偏在する

多くの人の感覚を反映するかのようには本書の副題には「異空間」という言葉が使われている。しかし、加藤は花街を確かに特殊な空間としながらも、私たちに意外な事実を教えてくれる。じつは特殊だと思われている花街が、日本全国に600カ所を超えて遍在していた空間であり、都市空間においてごく一般的に見られた空間だったと言う。

《昭和五（一九三〇）年末の段階で市制をしいていた百十三の都市のうち、花街の存在を確認できないのはわずか八市に過ぎない。このことは、都市に必須とはいわないまでも、都市がその内部に何かしらの契機で、花街という特別な機能をもつ空間を組み込んできた事実を物語っている》(p. 8)

多くの地方都市に住む人にとって遠い世界と思われがちな花街が、じつは私たちが生活する各地方と意外にも身近な存在であった事実に気付かされる。第一章に掲載されている「市制都市の遊廓と花街」の表を見て、自分が生まれた場所にもかつて花街が存在していた、つまり芸妓が活躍していたことを知って驚く人もいるのではないだろうか。

2 花街は近代の所産である

花街が日本各地の都市に遍在していた事実も意外であるが、さらに私たちが思い描く花街イメージとは異なった花街の近代性も本書では明らかにされる。加藤は《出版物における花街の語られ方に注目してみると、どうやらいくつかのスタイルがあるようだ》として3つのよく見られる語り口をあげている。

- [一] 吉原や新宿を中心とする遊廓誌とでもいうべき史誌／地誌的な語り
- [二] 吉原、洲崎、新宿、亀戸、新小岩、鳩の町、玉の井などの旧赤線地区を「消えゆく夢の街」としてとらえるノスタルジックな語り
- [三] 現在の東京の七花街——新橋、赤坂、葎町、柳橋、浅草、神楽坂、向島——を中心とする「江戸の文化が生きつづける」、あるいは「歴史と格式を誇る」という文化史的な語り

この3点の中から加藤は《ここで注目したいのは（部分的に [一] を含めた [三] に固有の語り口である。たとえば「江戸に遡る花街の歴史」と端的に表現されるごとく、それは江戸 - 東京の連続性を無条件に前提する語りにはほかならない》とする（p. 136-137）。《江戸時代に確立したという三業の制度を受け継いで現在まで存立する花街（三業地）は、「日本の伝統を今も色濃く残す貴重な空間」というわけだ》（p. 137）という花街を修飾する「伝統」と「格式」は東京花街だけの専売特許ではない。多くの花街は近代日本というより近代以前の日本を（良いか悪いかは別として）受け継いでいるのだと思っている人が多数派ではないだろうか。

ところが著者は通人・永井荷風が残した言葉から、じつは花街が江戸から続くものと前提にするのは違うのではないかと気がつく。永井荷風は《宴席に園遊会に凡そ人の集るところに芸者といふもの来らざれば興を催す事能はざりしは、明治年間四十余年を通じての人情なりけり》（p. 10）と述べている。これは近代になって芸妓が集団の宴席に興を添えるようになったことを意味しているのではないか。

そうして見ていくと、じつは東京の花街が大正期に次々と誕生したものであることが判明してくる。花街といえば封建時代の遺物が現代まで残っただけのように思っている人がいるかもしれない。しかし、事実は近代に入って大正期にもっとも増加し繁栄していたことが明らかになる。

3 地図から見る花街

遊郭と花街の違いとして芸妓の街と娼妓の街という区別はよく使われるものであるが、本書では地理学者らしい地図上の表記からの違いが扱われている。

《遊廓は市街地の周縁に立置し、しかもきちんと区画された「一廓」の形態をとることから、比較的容易にその所在地を地図、そして現実の都市に見て取ることができる。また、地図に「遊廓」という記載がない場合でも、旧市街地の周辺という立地に区画上の特徴を加味すれば、そこが遊廓であるとわかることもしばしばだ》(p. 45)。それに対して《遊廓とは対照的に、「花街」の情報が地図に記載されることは少ない。……「花街」は一般的には都市部の繁華街(あるいはその付近)に立地するものの、繁華街の周辺に集積するのはあくまで置屋であり、芸妓の出先となる料理屋は繁華街を中心として市街地全体(時には近郊の名所など)に分散して立地することもある。したがって、派遣される芸妓の行き交いからすれば街全体が「花街」といっても過言ではない状況を呈することもあるのだ》(p. 45)。

つまりはっきりと地図からも区域が判別できる遊郭と、ある程度のまとまりはあるとしても境界づけることのできない花街という違いがあるとする。《花街の立地と形態に関する以上の検討から明らかになるのは、都市空間にあって確たる存在感を示す遊廓とは対照的な「花街」のありようだろう。廓という名のごとく、遊廓が都市外縁の区画に囲繞された一方、「花街」は「一廓」型の形態もあるが「町芸妓」と称されるように繁華街の周辺に緩やかなまとまりをもって形成されていた》(p. 56)。

花街とは芸妓が存在して検番の設置されていた繁華街だったわけである。したがって、日本全国に「花街」が遍在していたのも納得がいく。たとえば本書でとりあげられている花街というのが、現在も繁華街として知られている場所ばかりなのだ。たとえば神戸なら元町や三宮であり、近郊から神戸に今でも遊びに行くとしたならそうした場所になるであろう。

さらに「花街」と「遊廓」では都市において位置する場所も異なっている。繁華街にある「花街」がどうしても都市の中心的な位置にある場合が多い。しかし、風紀などの理由によって目に付きやすい場所をうとんじられる「遊廓」になると、都市の中心でなく周縁へと配置されることになる。こうした地理的な「花街」と「遊廓」の差異は、花街の由来によくある名所近傍に自然に発展したという説明とは異なり、政治的・政策的な諸過程が働いていたことを教えてくれる。

《明治期以降に開設された花街は思いのほか多い。……「慣例地」といっても、すべて江戸時代に形成されたわけではなく、また名所に近接して「自然に発生」したわけでもない。むしろ、維新後の混乱のさなかに生じた都市空間の間隙に、機に乗じて入り込むことに成功した花街が発展したのである》(p. 154)

もっとも例外もある。《計画的に設置される「一廓」型の花街（遊廓を含む）は市街地の周縁あるいは近郊に、そして人口の増大や都市化の過程で形成される「花街」は繁華な商業地にそれぞれ立地することを指摘した。しかし、これはあくまで、花街の遍在とでもいうべき状況を呈するにいたった昭和初期の観察から得られた結果に過ぎない。花街はどこどこに立地させる、という近代都市の空間的な文法がいまだに確立されていない花街史の草創期にまでさかのぼってみると、そこには思いもよらぬ立地形態を見て取ることができる》(p. 74)。本書では「思いもよらぬ立地」として墓場や武家屋敷跡の例が紹介されている。このように、今後花街を地図で確認するときは、その花街がどこに位置しているかによって、成立時期や経緯を想像する楽しみを与えてくれる。

4 インキュベーターとしての花街

花街が現在の繁華街と重なるのは、花街そのものがその土地を開発・発展させるための手段だったからであることも本書で示されている。たとえば「銘酒屋」と呼ばれる売春を提供する店が田を埋め、畑を潰したあとにできる。すると周辺に一般の民家もできてきて、町の形が整う頃にはそういった店は消えるか私娼でなく芸妓のいる花街に変わっていった例が紹介されている。

また、花街がこうした都市の発展に欠かせない手段であったこと、発展させるだけの繁栄があったために、その許認可が利権になったのも当然のなりゆきだろう。花街をめぐる日本史上のいくつかの疑獄事件は、花街が都市政策において果たした機能が何であったのかを示していたのである。

現在、各地に残る花街の多くで町おこしや街づくりの動きが生じている。それらの活動の中には再び街が賑やかになるようにとの希望をこめてのものもあるだろう。そもそも花街とはその土地を発展・繁栄させるための手段だったのなら、非常に正しく花街を生かしていることになるのかもしれない。

本書において京都が取り上げられなかったことには理由があり、そしてそれは花街といえば祇園という（特に関西に多いであろう）イメージをはぐらかすという点で有効だと私は思っている。それでもできるならば次は京都の花街を取り扱った著者の研究成果をぜひ読みたい。京都の花街は他地域の花街と比べて現在も活躍の場を与えられている空間である。残っている花街だけでも花街の代表格のように語られる祇園をはじめ、日本最古の花街と自負する上七軒や、消滅寸前の「遊廓」島原などいくつかもある。これらの花街が人文地理という視点から見たときどのように読み解かれるのだろうか。

（朝日新聞社、2005年、本文322頁、本体1400円＋税）